

海外から本学への研修学生の来訪とその後の展開 2016 年前期

成田 有吾, 児玉 豊彦, 竹内佐智恵, 武田 佳子,
平松万由子, 福録 恵子, 山田 奈央

**A report on activities and effects of overseas students to the School of Nursing,
Faculty of Medicine, Mie University, in the first semester of 2016**

**Yugo NARITA, Toyohiko KODAMA, Sachie TAKEUCHI, Yoshiko TAKEDA,
Mayuko HIRAMATSU, Keiko FUKUROKU and Nao YAMADA**

2016 年前期に、ドイツ、フライブルク・カトリック大学から 4 名のインターンシップ研修生、ならびに、タイ、チェンマイ大学看護学部から 9 名が本学看護学科を訪問した。その後の展開を含め、資料として紹介する。

1. ドイツ、フライブルク・カトリック大学 Katholische Hochschule Freiburg (Catholic University of Applied Sciences Freiburg)

ドイツ南西部、フライブルク市にある、応用科学カトリック大学には、四日市市ご出身の広江尚美先生が国際交流センター長として積極的に活動されている。三重大学との交流は、教育学部に始まり、2014 年 6 月 11 日に医学部との学部間協定が締結された。フライブルク・カトリック大学に医学科はなく、実質的には看護学科との協定と理解される。こちら三重大学からは看護学専攻長の畑下教授はじめ、これまでに 1 週間の短期訪問が 3 回ほど行われた。

今回、2016 年 4 月 28 日から 7 月 26 日まで 4 名のフライブルク・カトリック大学生が三重大学にやってきた。彼らは医療保健管理経営 (B.A. Health Care Management) 学士コース、第 4 セメスター (つまり、2 年生後半) の学生で、全員、25~29 歳の社会人であった。高等学校を卒業後、専門学校で看護師資格を取得した男性 3 名、同じく医療補助資格を得た女性 1 名、それ

① フライブルク・カトリック大学 国際交流センター 広江氏、マティアス氏が 附属病院看護部長に面会



② 学長訪問



2016年6月16日

ぞれ病院勤務を経て、学士を目指して入学してきた。ドイツの大学制度や文化の違いもあり、学業のスケジュールのないときにはそれぞれの専門職として就労している。彼らの学ぶコースには、ドイツ内あるいは

外国での6週間以上のインターンシップを経験する必要がある。さらに、ドイツ国外への渡航に関する奨学金を獲得しようとするれば、2.5か月以上の現地滞在が必要であった。今回、全員、奨学金を獲得して、3か月の来日となった。

彼らは4月28日朝、中部国際空港（セントレア）に到着した。強風のため高速船が運航停止し、名鉄と近鉄を乗り継いで津駅にやってきた。さっそく三重大大学のドミトリー（留学生宿舎D棟）に移動して、彼らの日本での生活が始まった。ゴールデンウィーク期間には、本学の看護学科学生や教員の自宅にホームステイして日本の家庭を経験し、5月9日から6週間の三重大大学医学部附属病院での研修が始まった。この間、三重大看護学科教員からの講義、また、国際交流センターでの日本語授業にも参加した。院内では各部門を見学し、意見交換を行った。毎週金曜日には国際交流委員と各週の振り返りを行い、適宜、実習内容の確認と調整を行った。6月13日には、三重大大学医学部附属病院長と看護部長にプレゼンテーションを行い、附属病院の研修で学んだことを報告した。

このインターンシップの申し出は前年に遡る。前例もなく、医学・看護学教育センター長、附属病院長および看護部長、学科長に相次いで相談した。2015年9

月3日、三重県に里帰り中の広江先生に直接お会いして検討を進めた。あわせて、本学と関係の深い公的4病院（北から桑名東医療センター、国立病院機構三重病院、県立志摩病院、公立紀南病院）の責任者に、ご協力をお願いした。ドイツからの4名は、学内外、各地で、看護、臨床、医療経営に始まり、文化、風物などさまざまなことを経験した。

なお、研修内容については、先方からのカリキュラム等はなく、また、免許の問題、言葉の問題から、具体的な研修内容の構築に思案した。三重大大学での研修は、見学中心、全病院的規模での対応が、看護部の教育担当副部長はじめ多くの関係者、看護学科の各委員の尽力によりプログラムが形成された。来日するまでは研修生からも「なんでもあり」的な表現であったため、本学附属病院はじめ、関連4病院もどのように受け容れれば良いか、混乱した。来日後、具体的な活動の見学に加えて、病院経営についての関心が高かったため、それぞれの部署で情報提供に務めた。しかし、ことばや制度の違い、事前に英語版資料等の用意が調にくい状況から、未消化に終わったところも少なかった。

三重大大学での6週間の研修のあと、6月20日から7月22日まで、5週間の予定で、前述の関連4病院をローテーションして研修を続けた。それぞれの病院で





地域の特性に応じた臨床と病院運営を見学し、さまざまな交流（スタッフ、地域や療養中の小学生・中学生、地域の高校生）、ときには病棟や救急外来の作業、感染対策などの活動に参加した。

ドイツからのインターンシップ研修の最終週（7月18日～22日）には、タイ、チェンマイ大学看護学部からのチーム9名（学部学生8名と教員1名）が本学を訪問した。ドイツからの学生は、いくつかのタイチームの行事にも、参加した。最終日7月22日夕方のまとめの会は、あわせて3カ国の学生が交流する場となった。ドイツからの学生は自国の様子や3か月間の経験を、タイからの学生はチェンマイの文化やこの1週間

の感想を披露した。三重大学看護学科の学生は、このまとめと送別の会を、交流の総括の好機として企画、運営した。附属病院の看護部職員や看護学科の学生・教員に加えて、県立志摩病院や公立紀南病院での担当者も、送別会に駆け付けて場を盛り上げた。

ドイツからの4名にとって、初めての異文化地域での滞在であった。かれらは心身の体調を崩したこともあった。ことばの問題から、十分に伝えきれずにストレスを感じることもあった。しかし、関係各位のご協力により、無事に3か月の研修を終えることができた。

なお、彼らの日本語能力を形成するにはかなりの時間がかかる。ドイツでの半年間の日本語学習に加えて、来日後の日本語集中練習にもかかわらず、3か月の間に実用的な日本語会話の獲得には至らなかった。共通言語として、英語を使用した。少数回ながらドイツ語での通訳が入った場面では、非常に会話内容が増えた。また、受入側の英語能力向上の必要性も痛感する場面が多々あった。



その後、三重大学から2016年11月20日～24日に、看護学専攻博士前期課程学生ほか5名が同大学を訪問した。地域の医療・介護の公的提供システム、医療資源配分、医療経営、翌年に控えたドイツの介護保険制度改革など相互に関連する問題を体感して帰国した。2016年12月には、再度、ドイツ、フライブルク・カ

トリック大学から教員と学生が、三重大学を訪問する。「地域医療と医療資源のマネジメントに関して、日独に共通する諸問題と解決策に向け議論し、地域から世界を眺め、世界から地域を考える」ことをテーマにパネルディスカッションを予定している。今後、両大学間の交流が研究場面にまで発展することを期待する。

2. タイ、チェンマイ大学

Faculty of Nursing, Chiang Mai University

タイ、王立チェンマイ大学看護学部からの学生チームが、三重大学を訪問した。同大学は、本学医学部看護学科の提携校で、3年前から年に一度、相互に1週間の研修を受け容れてきた。今年は7月17日から23日まで、9名（学部学生8名と引率教員1名）が来日した。

7月17日（日曜日）朝、シンガポール航空で中部国際空港（セントレア）に到着し、津なぎさ町からは大学の自動車で宿舎のクリスチャン教育センターに移動した。看護学科棟でのオリエンテーションのあと、キャンパスや近隣を案内した。日本の寺院を訪問したいとの希望があり、この日のうちに委員が真宗高田派本山専修寺を案内した。

翌18日（月曜日、海の日）は休日だったが、午前中、

看護学科の教員や学生、ドイツからの研修生も参加して、看護学セミナーを開催した。本学学生が三重県や三重大学のこと、日本の看護制度などを概説し、続いて、チェンマイ大学からの学生がタイの看護師養成や医療についての紹介を行った。その後、引率のピヤヌート・シュート准教授がインターネットを用いた自身の介入研究を紹介し、共同研究を提案した。

セミナーのあと、一行は、看護学科学生、フライブルク・カトリック大学の研修生とともに、松阪市まで近鉄で移動し、昼食、松阪もめん機織り体験に続き、松阪城址では甲冑隊から英語での説明を受けた。御城番屋敷では、甲冑隊の一人の住居に上がらせてもらった。必要時には広い部屋として、襖を取り払って使える、コンパクトで機能的な家屋構造や、小さくとも緑ゆたかな庭を拝見できた。この間、3カ国の学生が相互に交流する機会となり、英語で活発な会話が聞こえてきた。

19日（火曜日）には三重大学医学部長への面会、看護学専攻長畑下教授からの学科紹介、学科および共通教育での英語による授業の見学、20日（水曜日）には、三重大学医学部附属病院見学、看護部長への面会、等のあと、彼らのみで近鉄に乗って名古屋まで行って、街を楽しんできた。21日（木曜日）には、ピヤヌート准教授と看護学科教員による研究検討、医学・看護学教

⑫ 看護学セミナー



学生からのタイの医療とチェンマイ大学看護学部紹介&引率のピヤヌート・シュート准教授の研究に関する報告

2016年7月18日

⑬ 松阪へ



近鉄で松阪へ。機織り体験に続き、松阪城址など見学

2016年7月18日

⑭ 学部長 訪問



2016年7月19日

⑮ 教養教育 スタートアップセミナー聴講



受講生によるプレゼン聴講後の意見交換と交流

2016年7月19日

⑩ 附属病院看護部 訪問



2016年7月20日

⑪ 附属病院 救急部 訪問



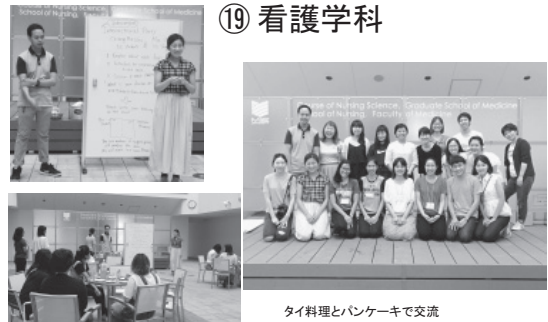
2016年7月20日

⑫ スキルズラボ 見学



2016年7月20日

⑬ 看護学科



2016年7月21日

育センターの英語担当の外国人教員と当科学生との英会話のランチタイムなどを経験した。21日午後には、チェンマイ大学チームが看護学科の実習室を利用してタイ料理を作り、当科学生とともにパンケーキを焼いて、看護学科棟の中庭で皆が幾つかのグループに分かれて賞味した。このとき、グループディスカッション形式で、将来展望など、それぞれに話題を提示して意見を集めることも試みた。

22日（金曜日）は、研修最終日ながら、大学のバスを利用して、竹内准教授の引率で紀南地区を訪問した。早朝、出発した頃より、あいにくの雨天で、途中、紀州らしい激しい降雨にもなったが、自然豊かな紀伊半島と海岸風景を楽しみながら、公立紀南病院に9時30

分頃に到着。同院、内科の森本真之介医師の案内で、病院見学に加えて、浅里地区を訪問した。同地区は5年前の大水害で被災した、熊野川沿いの過疎地域である。地域の共助を支える地域医療の実際を、現地に身をおいて知る機会となった。16時30分には大学に戻り、18時からのまとめの会&送別会に参加した。

最終日7月22日夕方は前述のように、ドイツ、フライブルク・カトリック大学からの研修生との合同で3カ国の学生が交流する場となった。チェンマイの文化では、繊細で優雅な舞踊とチェンマイ大学式のチアリーディングが披露された。また、彼らはパワーポイントを用いて1週間の研修内容や感想を20分程度でまとめて報告した。三重大学看護学科の学生は、それぞれの

⑭ 紀南病院と地域医療 見学



2016年7月22日

⑮ まとめ会



2016年7月22日

訪問者に気配りしながら、総括の好機ととらえて企画、運営した。

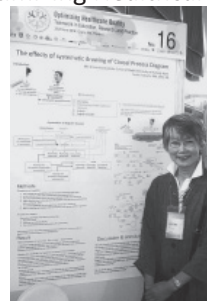
タイからのチームは全員、英語での会話は堪能で、ドイツ研修生とも積極的に交流していた。当方にとって、全体としての英語能力の向上は課題である。また、共同研究を提案されたときなど、不慣れな当事者を支え、必要な文書のひな形や内容のチェックなど支援できるシステムが必要である。今回、短期間（1週間）の訪問ののち、さっそく看護学科内での共同研究への対応が模索された。専攻長を含む、共同研究チームが、児玉豊彦講師（精神看護学）を中心に構成され、学内の他学部（工学部）の研究者および医学部医学科の臨床家を加えて始動した。

補遺：「チェンマイ大学看護学部主催の Optimizing Healthcare Quality に参加して」

2016年6月22～24日、チェンマイ大学看護学部が主催して国際学会「Optimizing Healthcare Quality: Teamwork in Education, Research, and Practice」がチェンマイで開催された。昨年度、引率のピヤワン・サワディシソング助教より参加を強く勧められていたため、当科から2題のポスターを発表した。この学会は、多職種

連携をテーマとし、チームワークの醸成、教育、臨床応用、研究を扱い、40カ国、400名を超える参加者で活発な討論が行われた。なかでも日本からの4大学（神戸大学、香川大学、琉球大学、東邦大学）は共同スポンサー（全18：14大学および4団体）として参画し、展示ブース、セレモニー、シンポジウム発表でも非常に目立った存在であった。これらの大学は10年以上のチェンマイ大学看護学部との関係構築があり、研究内容も基礎医学から看護学へと連携していた。学生の相互訪問から教員へ、さらにはさまざまな専門領域を繋げての交流に至る成功例のように感じられた。

㊸ 補遺：Optimizing Healthcare Quality参加



チェンマイ大学看護学部が主催の「Optimizing Healthcare Quality: Teamwork in Education, Research, and Practice」(6月22～24日)に三重大学からポスター掲示